

握手（井上ひさし）

一 作者と作品について

本名、井上 廈（いのうえ ひさし）。一九六一年から一九八六年までの本名は（うちやま ひさし）。遅筆堂（ちひつどう）とも名乗った。小説家。劇作家。

一九三四年十一月一七日、山形県東置賜郡小松町（現川西町）に生まれる。父は、井上靖と競った文学青年の井上修吉。ひさしとその兄弟は、戸籍上は非嫡出子（婚外子）として生まれ、五歳で父と死別。義父からの虐待を受け、母と東北地方を移り住むなど、幼少期の家庭環境は複雑である。その後、カトリック修道会ラ・サールの孤児院（現在の児童養護施設）である宮城県仙台市の「光が丘天使園」に預けられる。そこではカナダ人修道士たちが児童に対して献身的な態度で接していたようだ。

上智大学外国語学部フランス語学科を卒業。卒業前から執筆の仕事を始め、卒業後は放送作家として活動する。山元護久と共に、NHKテレビで放映された人形劇『ひよっこりひよっちゃん島』（一九六四年～一九九年放送）を手がけ、それが国民的人気番組となり一躍有名になる。一九七二年『モッキンポット師の後始末』（現講談社文庫）で小説界にデビューし、同年『手鎖心中』で直木賞を受賞。さらにテアトルエコーで上演された戯曲の中から『道元の冒険』で岸田國士戯曲賞を受賞。

椎葉 一勲、宮川 恵美子

小説家、戯曲家としての地位を確立した。以後も、戯曲、小説、エッセイに数々の話題作を生み、一九八一年『吉里吉里人』（新潮社）で日本SF大賞、読売文学賞、星雲賞を受賞。一九九一年『シャンハイムーン』で谷崎潤一郎賞を受賞。様々な分野で数々の受賞歴を持つ。また、てんぶくトリオのコント台本や、テレビ、ラジオ、アニメ、などまで手掛け、活動の幅は広く、多才ぶりを発揮した。八三年より直木賞選考委員を務め、日本劇作家協会理事、社団法人日本文芸家協会理事、社団法人日本ペンクラブ会長、仙台文学館初代館長、なども歴任。二〇〇四年文化功労者顕彰、二〇〇九年日本芸術院賞・恩賜賞受賞。

作家としてのモットーは「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白く」とあり、文体は軽妙であり、言語感覚に鋭い。膨大な資料を収集して作品を書くことも有名で、蔵書は「遅筆堂文庫」として故郷に寄贈された。二〇一〇年四月九日没。

二 叙述について



桜の花はもうとうに散って、葉桜にはまだ間があつて、そのうえ動物園はお休みで、店の中は気の毒になるぐらいすいている。

冒頭、場面設定を説明する段落で、季節、時を示す一文である。「とうに」は、「疾うに」と書き、文語形容詞「疾し」の連用形「疾く」のウ音便で、「とうに帰った」「とうの昔」などと使われ、「ずっと以前」「とつくに」という意味である。葉桜とは、桜の花が散りだし、若葉が芽吹き始めた頃から新緑で覆われる時期までの桜のことである。「桜の花はもうとうに散って、葉桜にはまだ間があつて」とは、「桜の花はとつくに散り、それから少なくとも数日が過ぎ、若葉の緑を楽しむまでは何日かはかかるという時期である」と説明できる。

「そのうえ」とは、「さらに」「それに加えて」という意味である。この語の前は自然景物の寂寥感を述べ、この語の後には人出の少なさ、人間世界の寂寥感を描写している。自然が淋しい、それに加えて、さらに、人間もいなくて淋しいと、寂寥感が強調される。

「気の毒」とは、他人の不幸や不運に心が痛むという意味の言葉であるから、「気の毒なぐらいすいている」との表現からは「わたしは、店の中には客が居なくてすいていることに、同情している」と解釈できる。他人のことでありながら、現状を詳細に観察し、同情している様子から、私が、繊細で優しい人であることが分かる。

この一文により、ルロイ修道士と私の二人があつたのは、桜の後、新緑までの季節、すなわち四月の下旬頃と推測できる。また、桜は、花が咲いてないばかりか若葉の美しさもまだ感じられない時期であるから、美しい風景とは言いがたい。しかも動物園が休園であることが重なる、人出がなく、決して賑やかではない。殺伐とした、閑散とし

た、上野の街の情景が想像される。二人の別れ、この世での最後の場面に相応しい、静かで淋しいイメージを、読み手に想起させていると言えらると思う。

小説の最後の段落で、ルロイ修道士が亡くなった季節が「葉桜が終わる頃」と表現されていることにも着目したい。いずれも何月何日という具体的な日時は書かれていない。時期の設定を自然景物の描写によつて表現し、日付は曖昧にしている。これは、具体的な日付の記録よりも、淋しい別れのイメージが大切であり、その寂寥感を読み手に想起させるための手法、作者の意図と言えるのではないだろうか。

その手を見て思わず顔をしかめたのは、光が丘天使園の子供たちの間でささやかれていた「天使の十戒」を頭に浮かべたせいである。

「思わず」ということから、わたしが、ルロイの手を見て、反射的に顔をしかめたことが分かる。「その手を見て顔をしかめた」と表現するよりも、「その手を見て思わず顔をしかめた」の方が、わたしが、ルロイの手に対して、潜在的になにかトラウマのようなものを抱えているということが伝わる。

「子供たちの間でささやかれていた」ということは、大きな声では言えない、先生に聞かれてはまずい話、ということである。もしこれが、「光が丘天使園で知られていた」だと、そこにいるすべての人が認識していることになるが、「子供たちの間でささやかれていた」とあるので、これは、天使園の子供たちの中だけが認識している暗黙の話だということになる。

「天使の十戒」が、さらにわたしの記憶の底から、天使園に収容された

ときの光景を引っ張りだした。

「記憶の底」ということは、自分にとって忘れかけていた記憶、意識しなければ呼び起こすことのなかった記憶ということだろう。

ルロイ修道士の「手」をきつかけに、「天使の十戒」を思い出し、さらにそれをきつかけにして、「天使園収容時の記憶」が思い出されたのである。この連鎖して徐々に古い記憶が呼び起こされていく様子を「引っ張りだす」という言葉で表しているのである。

ルロイ修道士は、病人の手でも握るようにそっと握手をした。

後の話で、ルロイ修道士がこの時すでに全身にがんを患っていることがわかるが、ここでの描写は、「病人が手でも握るように」ではなく、「病人の手でも握るように」と表現されており、病人の対象がルロイ修道士ではなく、わたしになっている。

かつてのルロイ修道士は、相手の手がしびれるぐらいに力いっぱい握手をしていたのだが、ここでは穏やかな握手をした。このことから、まずルロイ修道士の様子がいつもとは違うということを読者に印象づけている。

そして、「病人の手を握るようにそっと握手をする」という行為から、弱っている相手を気遣う心、配慮、優しさが伝わる。つまり、この表現から、ルロイの子どもを包み込むような「慈悲深さ」「優しさ」「ぬくもり」といった人間性が伝わる。

そのために、彼の手はいつも汚れており、てのひらはかしの板でもはっ



たように固かった。

「そのため」とは、その前の文の「園長でありながら会見やデスクワークを避け、畑や鶏舎にいて子供たちの食糧を作っていたこと」を指す。てのひらとは、たなごころ(掌)、手の内側を指す言葉。かし(樫)とは、ブナ科の常緑高木の名称、どんぐりの木のことであり、材は堅く弾力がある。「てのひらはかしの板でもはったように固かった」とは、当時握手したルロイ修道士の手は、弾力はあるが表皮の部分が厚く固くなっていて、まるでどんぐりの木の板のようであった、と説明できる。ルロイ先生が、園長という園の中で一番上の立場にありながら、手の皮が固くなるまで畑仕事に精を出していたことが分かり、偉そうにせず、陰での地味な作業にも努力する、修道士らしく謙虚な人柄を示す一文である。

この一文及び前後の文章で、ルロイ修道士の昔の手の固さを叙述することは、この日の「穏やかな握手」との表現と対比され、より強調していると思う。

ルロイ修道士は、「こら。」とか、「よく聞きなさい。」とか言う代わりに、右の人差し指をぴんと立てるのが癖だった。

「こら」とは、怒っている時に使う言葉である。「よく聞きなさい」も命令調で、聞いていない人に聞けと少し怒った状態で発する言葉である。「とか」とあるので、怒っている時に発する言葉はこの二つ以外にもあることを類推させる。「代わりに」とは、あるものに相当する他のもの、交替する、という意味である。ここでは、怒る言葉を言う代わりに指を立てるのであるから、ルロイ修道士は、この右の人差し指をぴんと立てる行為をした時、黙っていることが分かる。「癖」とは偏

って多いほどの（普通でない）仕方を繰り返してついた習慣、仕事という意味の語である。当時の修道院では、ルロイ修道士が怒る状況や、子どもたちが話を聞かない状況が頻繁に起こっていて、ルロイ修道士は、その度にこの仕事をしているうちに習慣化し、癖になってしまったことが分かる。

ルロイ修道士は、直接に言葉で怒ったり命令したりすることはせず、右の人差し指を立てた状態で、何も言わない一瞬の「間」を作り、怒る言葉を飲み込んでから、子どもたちを諭すように話をしていた様子が想像できる。ルロイ修道士の、辛抱強く、いつも冷静で、感情を表に出さない性格と、良き指導者であったことが読み取れる。

この指の動きでルロイ修道士は、「おまえは悪い子だ。」とどなっているのだ。

「この指の動き」とは、その前の行の「両手の人差し指をせわしく交差させ、打ちつけている」という動作のことである。「で」は手段・材料・理由などを表す格助詞である。従って「この指の動きで」は「両手の人差し指をせわしく交差させ、打ちつける動作によって」という意味になる。

「どなる」とは「大声で叫ぶ、しかる」という意味であるから、「この指の動きで」の語がなければ、ルロイ修道士は「おまえは悪い子だ。」と「大声でしかっている」という意味になる。しかしここでは、実際にルロイ修道士は言葉を発していない。にもかかわらず、わたしは指の動きによって、悪い子と怒鳴りたいほど怒っているルロイ修道士の心を理解している。「おまえは悪い子だ」は、実際には発せられていないにもかかわらず、指の動きによって「わたし」が感じ取った、ルロ

イ修道士が心の中で大声で怒っている言葉である。しかも「のだ」とあるので、断定が示され、わたしはそのことを強く確信していると言える。指言葉という語を導き出し、説明している一文だと思う。

きつと平手打ちが飛ぶ。

「平手打ちされる」と表現するのではなく、「飛ぶ」と表現することによって、「突然」「すごい勢いで」というニュアンスが伝わる。

元園長は何らかの病にかかり、この世のいとまごいに、こうやって、かつての園児を訪ねて歩いているのではないか。

「元園長」とはルロイ修道士のことである。

「何らかの」とあるが「ら」は複数を表わす接尾語であるから考えられる病はいくつかあって、この段階ではわたしはルロイ修道士の病が何か、はっきりと分かっていないと言える。

「いとまごい（暇乞い）」とあるが、「いとま」は、ここでは単なる暇（ひま）という意味ではなく「別れ」という意味である。「おいとまいたします」などの用例と同じ意味である。前に「この世の」との語があることから、ここでの「いとまごい」の意味は、「休暇を願い出る」や「故郷に帰り休みたい」という意味ではない。「この世に別れを告げること」と解釈すべきであろう。読み手に、この世界からの永遠の別れである「死」を連想させる語となっている。

「こうやって」とは、「ルロイ修道士がわたしを上野に呼び出し逢いに来た」ことを指す。

「かつての」とあるが、「かつて」は、現在からかなり前のある時期に、経験してきたことや感じたことなどをいう場合に用いる語である。

「これまでの」「以前の」などの語に置き換えが可能であるが、「かつての」の方が、遠い過去という語感がある。ここでの「かつての」は、置き換えを試みるならば、「昔の」に近いのではないだろうか。

「園児」とはわたしを含めた、かつての「光が丘天使園」の教え子たちのことである。

「のではないか」とあるので、疑問・反語の文形である。「ないか」の後に「きつとそうに違いない」などの語を補うと分かりやすい。

ルロイ修道士のことを、他の個所ではほとんど「ルロイ修道士」と書き、会話文では「先生」と呼んでいるのに、ここでは「元園長」と表現されている。「わたし」も「園児」となっている。ルロイという固有名詞や「わたし」を使わずに、役職名や肩がき、立場の名称で書かれていることに注目したい。これは、わたしの中にもう一人のわたしを設定され、第三者的立場でわたしがわたしを客観視している表現と云えるのではないか。わたしの心中語でありながら、それを客観的な視点で、突き放すように書いた表現である。「ルロイ先生は何らかの：(中略)：こうやって、わたしたちを訪ねて：(後略)」と表現されるよりも、強く、突き刺す様に、読み手の心に響く。

ここは、わたしが、「ルロイ修道士の死期が近いこと、だから自分に逢いに来たこと、これが二人の最後の時間であること」などに気づく場面で、この一文は、わたしの心中語である。この段落の初めでは、「冗談じゃないぞ、と思った。」と、同じ心中語に対して「と思った」と、心中語であることを説明しているが、この段落の最後の文では、それが省かれ、文章は次の会話文へと流れていく。この場面には他にもいくつかのわたしの心中語があるが、この段落の中で「と思った」と説明する語は、読者すら気づかないうちに消されていく。このことは、

読み手に、わたしの心の衝動の高まりや臨場感を感じさせる効果を生んでいるのではないだろうか。作者の劇作家的一面を表し、読み手を引き込むような文章表現の上手さを感じる部分である。

ルロイ修道士は顔をしかめてみせた。

「顔をしかめた」ではなく、「しかめてみせた」のである。「てみせる」ということは、相手に分からせるために故意に何かをするということである。つまり、この場面では、ルロイ修道士が、わたしに、死期が近づいていることを悟られたため、それを誤魔化すために、わざとしかめたふうに見せて、あたかもそんなおどけた真似をする余裕があるという素振りを見せつけたかったのではないだろうか。

かつて、わたしたちがいたずらを見つけたときにしたように、ルロイ修道士は少し赤くなって頭をかいた。

ルロイ修道士は、死期が近づいていることをわたしに悟られてしまい、まるでいたずらがばれてしまった子どものように、顔を赤らめて頭をかいたのである。つまり、わたしたちがいたずらを見つけた時に赤くなって頭をかいたのと同じように、ルロイも赤くなり頭をかいたのである。

かつての教え子たちに、病気で死期が近づいているを知られたくないが、最期にみんなと会っておきたいと思うルロイの親心と、「少し赤くなって頭をかいた」というルロイの子どものような一面が、この一文で見とれる。「少し赤くなって」というところから、嘘が見つかって動揺した様子がわかる。

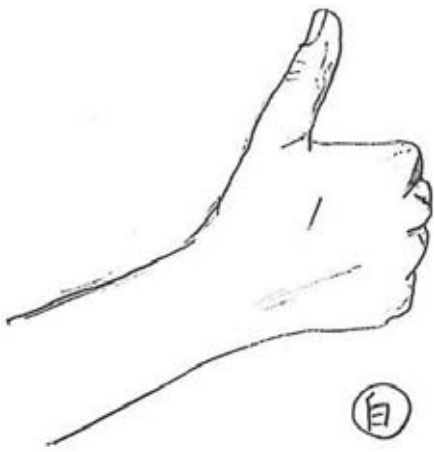
葬式でそのことを聞いたとき、わたしは知らぬ間に、両手の人差し指を交差させ、せわしく打ちつけていた。

「わたしは知らぬ間に」ということから、「わたし」が無意識のうち起こした行動であったことが読み取れる。無意識のうちということとは、一種の放心状態ともとれる。

「両手の人差し指を交差させ、せわしく打ちつけ」ることは、前に出てきたルロイ修道士の癖で、「おまえは悪い子だ。とどなっている」意味をあらわす。さらに、これを「せわしく」行っていることから、わたしの心中が決しておだやかではないことが強調される。

ルロイ修道士が、自身の死期を悟って、天使園のかつての教え子たちに、最期の挨拶をしてまわっていたということに対して、「わたし」は、病気という目に見えない敵への悔しさと、ルロイが最後の最後まで「わたし」たちに病気があったことを打ち明けなかった、親心に対してのいらだたしさゆえに、指を打ちつけていたのではないだろうか。

「わたし」は、ルロイとのレストランでの食事の時点で、うすうす、その死期が近づいていることに勘付きはしていたが、心のどこかそれを信じたくないと思い、それからの日々を過ごしていたのだから。そのかすかな希望が、ルロイの葬式で崩れ去ってしまったときの、感情の爆発が、「知らぬ間に」「せわしく」「指を打ちつける」という行動に反映されているのであ



三 考察—作品に一貫性を持たせている『握手』という行為

『握手』という題からもわかるとおり、作品の中で何度も描かれている「握手」は、作品全体に一貫性を持たせ、また読み手を主題へ導く役割をもっている。

(一) 回想シーンへのきっかけとしての「握手」

「ルロイ修道士は大きな手を差し出してきた。その手を見て思わず顔をしかめたのは、光ヶ丘天使園の子供たちの間でささやかれていた「天使の十戒」を頭に浮かべたせいである。」

まず、最初の「握手」をきっかけとして、わたしの過去、そしてルロイ修道士の過去の回想がはじまる。この回想シーンにより、わたしの生い立ち、ルロイのかつての力強い握手を描き、そのあとに起こるルロイの”変化“への伏線となっている。

(二) ルロイ修道士の変化を印象付ける「握手」

「だが、顔をしかめる必要はなかった。それは実に穏やかな握手だった。」

この一文により、万力よりも力強かったルロイの握手に、変化が起きたことに読者は気付く。それは、かつて「彼の握手は万力よりも強」かったルロイの様子とは真逆で、「穏やかな握手」へと変化しているのである。ここでは「握手」を通して、ルロイの変化が描きだされているのである。

(三) わたしの心情をあらわす「握手」

この作品に出てくる最後の「握手」は、わたしがルロイと別れを告げるときに、かつてルロイにされたように「握手」をするシーンである。このシーンと、わたしが真似たルロイの握手を並べてみると、

「わかりましたと答える代りに、わたしは右の親指を立て、それからルロイ修道士の手をとって、しっかりと握った。それでも足りずに、腕を上下に激しく振った。」



「風呂敷包みを抱えて園長室に入っていったわたしを、ルロイ修道士は机越しに握手で迎えて、「ただいまから、ここがあなたの家です。もう、なんの心配もいりませんよ。」と言ってくれたが、彼の握手は万力よりも強く、しかも腕を勢いよく上下させるものだから、こっちの肘が机の上に立ててあつた聖人伝にぶつかって、腕がしびれた。」

この二つの握手は、同じ行動をとった握手であるが、それぞれ、ここに込められた心情は正反対のものであるように感じる。

この作品では、一年前の上野公園でルロイと会ったという回想シーンの中で、さらに天使園の出来事を回想するといったように、時制が複雑に入り混じり、そのことにより、作品に立体感のようなものを持たせている。また、いたるところに伏線が隠されていて、繰り返し読むたびに読者は新たな気付きを得られる。その複雑な回想、伏線を束ねる役割を、「握手」が果たしていると考えられる。

